

## ❁ 医療職のための統計シリーズ

医療職のための学び直し—研究デザインから論文報告までの生物統計学の道標—  
第18回 文献検討の進め方ヨネクラ ユウキ  
米倉 佑貴\*

## I はじめに

本連載の第2回「量的研究におけるリサーチクエスションのたて方」で、良いリサーチクエスション・研究テーマの条件として“FINER”というものがあるということを紹介した<sup>1)</sup>。Fは“Feasibility”で実現可能性、Iは“Interesting”でテーマの興味深さ、Nは“Novel”で新規性、EはEthicalで倫理性、Rは“Relevant”で必要性である。研究計画書を作成する際や研究成果を論文や報告書としてまとめる際には、研究テーマで扱う事象や背景についてわかりやすく説明し、そのテーマに関する既存の研究成果を確認して、批判的に吟味し、研究の必要性や新規性を示す必要がある。

保健医療系の量的研究の計画書や論文においては、その研究テーマで扱う健康問題の発生状況、健康問題が個人や社会に与える影響の程度を統計結果や先行文献で明らかになっていることを示すことで研究の必要性を示し、その健康問題に関連する要因にはどのようなものがあるか、要因に対する介入や治療にはどのようなものがあるか、などについて文献を検討することにより、研究の必要性や新規性を示していく。

今回はこうした文献検討の進め方や文献検討をする際に有用なツールなどを紹介する。

## II 文献検討とは

文献検討はすでに発表されている研究成果を確認し、これから行う研究の新規性や必要性、興味深さを示すために必要なステップである。また、コクランレビュー<sup>2)</sup>のように系統立った方法に基づいて行われ、それ単体で論文として公表されるものもある。大木<sup>3)</sup>は前者のような

一次文献の中で研究の新規性や必要性を示すために行われる文献の検討を「文献検討」、後者のコクランレビューのようにそれ自体を一つの研究として行う文献の検討を「文献レビュー」として区別している。研究計画書や一次文献における「文献検討」では、論文全体のページ数や引用文献数の制限があるため、文献検索の方法や選択基準、文献から抽出する情報やその抽出方法などの文献検討の方法について記述することや、検討の対象となる文献の網羅性は求められないことが多い。しかしながら、系統だった方法により、網羅的に文献を検討することで、偏りなく、十分な根拠をもってこれから行う研究の必要性や新規性を示すことができるため、可能な限り系統だった方法で行うことが望ましい。

本稿では大木<sup>3)</sup>の分類の「文献検討」を念頭においてその手順を解説していく。

## III 文献検討の進め方

文献検討の進め方は通常の研究の進め方と類似しており、通常の研究の対象者が「文献」に置き換わったとみることもできる。文献検討は、(1)文献検討の目的や問い(レビュークエスション)を決め、(2)必要なデータ(文献)を収集し、(3)文献(データ)の内容を分析し、(4)分析結果を解釈し、(5)結果をまとめる、という流れで進めることができる。一方で通常の研究と異なるのは、データ収集に当たる文献の検索や収集は通常の人を対象とした研究よりもかかるコストや労力が低く、繰り返し行うのが比較的容易であるということである。したがって、一連の文献検討を行った時点で新たな問いが出たら、それについて再び文献検討を行うことや、分析途中で文献検索を再度行い、分析対象を追加する

\* 聖路加国際大学大学院看護学研究科准教授